

Ebony マナーの穀物生産について (1286～1324年)

能 登 征 夫

目 次

- I 問題の所在
- II 直営地耕作
 - 1) インフィールド・アウトフィールド制
 - 2) 穀物生産の推移
- III 生産の拡大・縮小の背景
 - 1) 修道院の穀物需要
 - 2) 穀物価格
 - 3) 穀物の生産性
 - 4) 農業収益
- IV 結 語

I 問題の所在

筆者は、カンタベリ司教座聖堂付属修道院（Canterbury Cathedral Priory）が中世のケント州で展開した農業経営を明らかにする一端として、すでに Great Chart マナーの直営地耕作を分析した¹⁾。このマナーでは、14世紀初頭に小麦生産の著しい拡大が見られたが、それは1308年から14年までの——より正確に言えば、1305～08年のある時点で始まり、14年あるいは15年に終わる——極めて短期的な現象であった。1308～14年の小麦の作付面積は年平均125a.（エイカー）であったが、これは1289～1304年の66a. のおよそ1.9倍に相当する。その後小麦生産は一転し、1316～27年の作付面積はピーク時の約62%にあたる77a. にまで縮小された。

筆者は、直営地耕作におけるこの極端な拡大と縮小がいかなる動機に基づいて行われたかを検討し、以下のような結論に達した。すなわち、小麦を中心とする穀物の増産が、価格に反応して行われたものではなく、修道院の穀物需要に応えるために行われたものであること、また劣

悪な土壌条件を改善するために費用のかさむ泥灰土の散布を行ったにもかかわらず、生産性の低下と農業収益の悪化が生じ、これが穀物生産縮小の原因になったこと、以上である。

本稿の分析対象である Ebony も、Great Chart 同様、カンタベリ修道院に属するケント州内のマナーであるが、ここでも14世紀初頭に小麦の作付面積が急激に拡大された。1305～14年の平均播種面積は1295～1304年（7.3a）のおよそ5.4倍にあたる39.1a. に達しており、Great Chart を上回る規模の拡大がみられた。小麦生産の拡大が短期的な現象に終わった点も Great Chart と同じであったが、直後の1316～24年の播種面積は33.5a. とピーク時の86%にとどまっておろ、縮小の程度は Ebony のほうがずっと小さかった。

本稿では、Great Chart との比較を意識しつつ、14世紀第1四半期の Ebony マナーにおける著しい穀物生産の変動を分析し、変動を引き起こした要因を明らかにする。分析した史料は Canterbury Cathedral Archives Collection に収められた Ebony マナーの「荘役会計報告書」（*Comptus servientis de Ebbene, Serjeant's account of Ebony*）のオリジナル・マニユスクリプトである²⁾。考察期間は1286年から1324年までのおよそ40年間であるが、とくに14世紀初頭が分析の中心である³⁾。

II 直営地耕作

この節では、はじめに耕地制度を、ついで穀物生産の推移を考察する。

1) インフィールド・アウトフィールド制

Ebonyはケント南部にあり、Isle of Oxneyおよびその周囲の沼沢地を領域とする湿地帯のマナーで、Rother川をもって北および東側の境界としていた⁴⁾。このため、堤防を築いて河川の氾濫に備えるとともに、内部の湿地を干拓して耕地や放牧地を拡大した。Ebonyの干拓事業は、遅くとも13世紀初頭⁵⁾、おそらくはそれ以前に開始されており、われわれの考察期間中も事業は継続されていた。荘役会計報告書には、堤防の建設と強化・水路の開設と補強のための費用がかなりの額でほぼ毎年支出されている⁶⁾。

こうした状況を反映して大小さまざまな耕地片が湿地に存在した。湿地にある耕地はマーシュランド (marshland, *terra in marisco*) と呼ばれ、湿地以外にある耕地はアップランド (upland, *terra susana*: 高台の耕地) と呼ばれていた。マナーの土壌が石灰分の少ない痩せたものであったため、マーシュランドは無論のこと、アップランドも穀物栽培に適しているとは言い難い耕地であった⁷⁾。土壌条件が劣悪であるという点で Great Chart に類似していた Ebony では、Great Chart と同じ耕地制度、「インフィールド・アウトフィールド制」(infield-outfield system) を採用していた。これは、耕地をより肥沃な部分(インフィールド)と地力の乏しい部分(アウトフィールド)に二分し、前者で集中的・継続的な栽培を行い、後者で一時的あるいは断続的な栽培を行うものである。インフィールド・アウトフィールド制は、劣悪な耕地の多い地域でしばしば採用された制度であり、カンタベリー修道院のマナーにとっても決して珍しい方法ではなかった⁸⁾。

インフィールド・アウトフィールド制の実態を知るためには、播種された耕地を把握する必要がある。その手がかりとなる耕地名が初めて登場するのは1304年の会計報告書であり、その後24年の報告書まで播種地は例外なしに記載された。1304年に耕地名の記載が始まったことは、後述するように、1303年に初めて泥灰土と石灰の散布 (*marlatura*, *marling*; *slycatura*, *liming*)

が実施されたことや、1305年に小麦の播種面積が初めて20aを超えたことと無関係ではなく、マナーが穀物生産に真剣に取り組みはじめたことを示すものである。1304～24年のEbonyの耕地の利用状況を示したものが表1である⁹⁾。

表1からは以下の諸点を指摘することができよう。

①アップランドには、ほとんど休閑なしに利用された M.Donne, N.Hassok, Hongyndehelde のような耕地がある一方、4年以上にわたる休閑の後に利用された O.Botfelde と P.Donne, ほとんどオート麦しか栽培されなかった Vetus Forstalle のようにアウトフィールドに近い形の耕地も存在する。しかし、作付の頻度、作物の種類からみて、アップランド全体がインフィールドとして位置付けられていたように思われる¹⁰⁾。輪作の方法は耕地によってさまざまであり、アップランドに共通のパターンを見いだすことは不可能である。

②マーシュランドには、アップランドの Vetus Forstalle よりも播種頻度の高い Frydonne が存在するものの、1307～11年の5年間以外はまったく利用されなかった Snelmannesflete や、1年おきに利用された Fozelhook, Wynenefelde など、利用頻度の低い耕地がほとんどであり、マーシュランド全体がアウトフィールドとして利用されていたようである。

③作付面積がわずかなライ麦と作付回数の少ない大麦を除けば、アップランドでは小麦を中心に、オート麦、豆類(ソラマメとカラスノエンドウ)がすべてひろく播種されていた。これに対し、マーシュランドではオート麦がほとんどで、小麦と豆類は少なく、とりわけ豆類は Frydonne の1311年を例外としてまったく植えられなかった。マーシュランドの唯一の例外も含めて、豆類はほとんどの場合小麦の後作として植えられていた。

このように、条件の良いアップランドはインフィールドとして継続的に利用され、小麦とオート麦、とくに小麦が集中的に栽培されていた。他方、地力の劣るマーシュランドはアウト

表1 インフィールド・アウトフィールド制 (単位: エイカー)

年度	upland										marshland												
	N. Botfelde	O. Botfelde	M. Donne	P. Donne	Vetus Forstalle	N. Hassok	O. Hassok	Hongyndeheide	M. Palstre	P. Palstre	Shepteghe	N. Apelton	O. Apelton	Conlese	Crokwelmed	Fozelhook	M. Frydonne	P. Frydonne	P. Nova terra	Snelmannesflete	Vispendfelde	Wynenefelde	
1304	O 7				O 3	W 9	O 2				O 11	O 7	O 3	O 22	O 14	O 5	W 3						
1305			W 10			W 5	O 7						O 3										
1306			O 10			O 7	b 5	W 4	W 16		R 8	O 1				O 5	W 3						
1307	W 7		O 10		O 1	W 5	W 4	b 5	v 5	W 5	O 9		O 3	O 25						B 15			
1308	W 7		W 2	v 3	O 6	W 2	O 3	W 5	W 4	W 10	b 6		B 3	O 3	O 7		O 5			B 5	O 9	O 17	
1309	O 7		W 6	O 2	W 12	O 5	W 6	O 5	b 4	b 2	v 8	W 6	O 3	O 21			O 6	W 3		W 4	B 11	O 13	
1310	W 7		W 9	v 8	b 10	v 2	O 7	W 5	W 4	W 10		R 4	O 7			O 14	W 5			O 14		O 18	
1311	O 7	W 8	W 17	W 12	R 5	W 4	O 2	b 4	v 10	W 6	O 11		O 3	O 26			O 6	b 3		W 4	B 8	O 13	
1314	W 7	W 8	O 5	v 12	b 12	O 5	W 7	O 5	O 4	W 10		W 11					O 5	R 7	W 4	O 2		O 18	
1316	W 3	O 3	O 6		O 6	b 6	O 6	O 5	O 4	O 8	v 1	O 5	O 10	O 6		O 14	O 5		O 4			O 14	
1317	W 7	W 8	b 9	v 8	W 6	O 6	O 7	O 4			W 11		O 3				R 5	O 5				O 15	
1318	O 7	v 8	W 17			W 7	O 5	O 4	W 10	W 6	b 11	R 6			O 5	W 3	O 6	O 6				O 18	
1319	W 7	W 8	b 9	W 12	R 5	O 7	W 4		v 6	W 11	O 6	O 6	O 23				O 6					O 13	
1320			W 17	O 12	W 1	R 3	O 5	W 3	O 5	v 4	W 10	b 6	O 6	O 3	O 14	O 5	O 6					O 18	
1321	W 7	O 8	b 7	v 9	O 5		O 4	W 10	W 12	W 6	O 11		O 3										
1324	O 7	W 8	W 9	b 3	v 11	W 7	O 5	W 4		W 5	b 11	W 9		O 13			W 3					O 18	

[出所] *Comptus servientis de Ebene* in the Canterbury Cathedral Archives Collection.

[備考] ・耕地名に付された略号は, N:Nethere(= Lower), O:Oppere(= Upper), M:Magna(= Great), P:Parva(= Little)を表わす。

・上段のアルファベットは作物の種類 (B:大麦, O:オート麦, R:ライ麦, W:小麦, b:ソラマメ, v:カラスノエンドウ) を表わし, 下段の数字は播種面積を表わす。ただし, 大麦とオート麦は冬蒔き, 春蒔きの別を考慮しないで表示したものであり, 播種面積は1エイカー未満を切り捨てたものである。

フィールドとしてさまざまな形で利用されたが, 小麦はわずしか栽培されず, もっぱらオート麦の生産にあてられていた。Great Chart では小麦がアウトフィールドでも積極的に栽培されていたから¹¹⁾, アウトフィールドでの栽培が例外的であった Ebony のほうが恵まれた条件

の下で小麦生産を拡大したことになる。

2) 穀物生産の推移

1286年から1324年までのおよそ40年間の播種面積を, 小麦, ライ麦, 大麦, オート麦, 豆類の5つに分類して示したものが表2-1である。

表2-1 播種面積 (単位: エイカー)

年度	小麦		ライ麦		大麦		オート麦		豆類		合計 a.
	a.	%	a.	%	a.	%	a.	%	a.	%	
1286	16 ¼	11.8	8 ½	6.2			104	75.8	8 ½	6.2	137 ¼
1287	15	10.4	1	0.7			120 ½	83.8	7 ¼	5.1	143 ¾
1288	13	9.9	4 ½	3.4			114 ½	86.7			132
1289	9	7.0	3	2.4			112	87.5	4	3.1	128
1290	12	9.5	4	3.2			101	80.5	8 ½	6.8	125 ½
1291	12 ¼	8.5	6	4.2			117	81.5	8 ¼	5.8	143 ½
1292	10 ½	7.7	4 ½	3.3			112	82.7	8 ½	6.3	135 ½
1293	9	6.6	6	4.4			115	84.9	5 ½	4.1	135 ½
1294	9	6.6	1	0.7			127 ½	92.7			137 ½
1295	2	1.5	2 ¼	1.7			130	96.8			134 ¼
1296	6 ½	4.4	7 ¼	4.9			132 ½	88.7	3	2.0	148 ⅞
1297	3 ⅞	2.5	2 ⅞	1.7			121	95.8			126 ¼
1298	4	2.7	6	4.1			137	93.2			147
1299	7 ½	5.0	5 ¾	3.9			135	91.1			148 ¼
1300	7	4.8	8 ½	5.8			131	89.4			146 ½
1301	8 ¼	5.4	6 ¼	4.1			138 ¼	90.5			152 ¾
1302	10	7.5	3 ½	2.6			119 ½	89.9			133
1303	7 ½	5.0	1	0.7			140 ¼	93.0	2	1.3	150 ¾
1304	16 ⅞	11.3					129 ⅞	88.0	1	0.7	147 ¼
1305	21 ¼	15.5	3	2.2	3 ½	2.6	106	77.5	3	2.2	136 ¾
1306	29	20.1	8 ¼	5.7	10 ½	7.3	88 ⅞	61.3	8	5.6	144 ⅞
1307	40 ¾	25.4	4 ½	2.8	15	9.3	90	56.0	10 ½	6.5	160 ¾
1308	36 ½	20.3			11 ¼	6.3	119 ¼	66.4	12 ½	7.0	179 ½
1309	42 ¾	24.0			11	6.2	110 ½	62.0	14	7.8	178 ¼
1310	39 ¾	21.1	4 ½	2.4			124	65.9	20	10.6	188 ¼
1311	51	26.7	5	2.6	8	4.2	108 ½	56.9	18 ¼	9.6	190 ¾
1314	52	27.2	7	3.7			108	56.5	24	12.6	191
1316	3	1.9					147 ½	93.7	7	4.4	157 ½
1317	32	17.4	5	2.7			130	70.5	17 ¼	9.4	184 ¼
1318	43 ½	23.7	6	3.3			115	62.7	19	10.3	183 ½
1319	42 ½	23.8	5	2.8			116	65.0	15	8.4	178 ½
1320	27	13.7	3	1.5			146 ½	74.2	21	10.6	197 ½
1321	40 ½	24.5					109	65.8	16	9.7	165 ½
1324	45 ¾	25.3					110	60.9	25	13.8	180 ¾

〔出所〕 *Comptus servientis de Ebbene*

〔備考〕 大麦とオート麦は冬蒔きと春蒔きを合計したものである。

最も多く栽培された作物はオート麦で、作付面積は常に50%以上、とりわけ小麦生産が拡大するまではほぼ80%を超えていた。オート麦について多かったのは小麦であるが、1304年までは10%を超えることは稀であった。その重要性が高まるのは1305年以降である。小麦について多く播種されたのは豆類である。すでに表1でみたように、豆類は小麦の後作として植えられることが多かったから、小麦の比重が高まった

1305年以降、播種面積はしだいに拡大した。一時的に、おそらくは試験的に栽培された大麦は無論、ほぼ全期間を通じて栽培されたライ麦も面積はわずかであり、豆類が地力の維持を目的として植えられるものであったから、このマナーでは小麦とオート麦の生産を目的とする農業経営が行われていたことになる。

1304年まではほぼ80%を超えていたオート麦の播種面積が小麦生産の拡大にともなって縮小

し始めたことからみて、穀物生産がオート麦から小麦への転換を中心に展開されたことは明らかである。この点は総播種面積の推移からも確認できる。播種面積の合計が初めて150 a.を超えたのは1301年であり、07年に160a.に達した後、さらに播種地が拡大されて11年には190a.を記録した。したがって、1300年代の初頭を画期として農業経営に大きな変化が生じたことになるが、この時期こそがオート麦を犠牲にした小麦生産の拡大期であった。このように、Ebonyでは14世紀初頭に、それまでのオート麦を中心とする農業経営から小麦生産の拡大を中心とする積極的な経営への転換が行われた。それゆえ、ここでは小麦生産の変化にスポットをあてて分析を行う。

当初から低調であった小麦生産は1295年からさらに低調になり、1304年に至ってようやくそれまでの最大面積（1286年の16¼ a.）を超えた。初めて20a.を超えた05年以降に播種地が急激に拡大され、14年にはピークの52a.に達した。長雨と洪水による打撃を受けて3 a.にまで落ちこんだ16年以降も、マナーの小麦生産に対する意欲はそれほど低下せず、依然として高い水準を維持していた。このように、小麦生産はほぼ10年を周期に縮小と拡大を繰り返していた。小麦生産の変化を基準にして播種面積の変化をみたものが表2—2である。

表2—2 平均播種面積（単位：エイカー）

期 間	小麦	ライ麦	大麦	オート麦	豆類	合計
1286～1294	11.8	4.3		113.7	5.6	135.4
1295～1304	7.3	4.3		131.4	0.6	143.6
1305～1314	39.1	4.0	7.4	106.8	13.8	171.1
1316～1324	33.5	2.7		124.9	17.2	178.3

〔出所〕表2—1

ここからは、次の諸点を指摘できよう。

①総播種面積は増加傾向にあったが、とくに1295～1304年から1305～14年にかけて著しく増加しており、この時期が経営の転換期であったことを示している。主穀である小麦とオート麦の合計でも、125.5a., 138.7a., 145.9a.,

158.4a.とすだいに増えており、生産が順調に拡大したことを示している。

②小麦とオート麦は変動の動きが正反対であった。つまり、小麦が増加する時期にはオート麦は減少し、小麦が減少した時にはオート麦は増加した。したがって、主穀がともに増加する全面的な拡大はみられなかった。

③小麦生産がピークにあった1305～14年には、大麦が初めて栽培されるとともに、豆類の作付けが急激に拡大し、逆にオート麦は著しく減少した。作物の内容面からみても、この時期が農業経営上の転換期であったことは明白である。

④1316～24年は1305～14年の方針を軌道修正した時期で、大麦栽培の停止、小麦とライ麦生産の削減、オート麦と豆類の拡大がみられる。なお、5 a.以上削減された小麦であるが、異常気象により縮小を余儀なくされた16年を除いて計算すれば、38.5a.とピーク時とほぼ同じ水準を維持しており、軌道修正が小麦生産の削減を目的としたものでなかったことは明らかである。

このように、Ebonyではほぼ10年ごとに穀物生産の方針に変化がみられたが、次節では、1305～14年の積極策への転換と1316～24年の軌道修正がいかなる動機に基づいて行われたかを中心に分析する。

Ⅲ 生産の拡大・縮小の背景

穀物生産の拡大や縮小は領主の有利あるいは不利の判断にしたがって行われるが、そうした判断の根拠となる要素として、例えば、領主の穀物需要、穀物価格、穀物の生産性、収益性などがあげられる。

この節では、これらが前節で明らかにした農業経営面における変化とどのようにかかわっているかを考察する。

1) 修道院の穀物需要

カンタベリー修道院では、Great Chartを含む多くのマナーが納付する穀物によってその必要

表3 穀物の売却と納付

年度	小麦		ライ麦		大麦		オート麦		豆類	
	売却 qr. bu.	納付 qr. bu.	売却 qr. bu.	納付 qr. bu.	売却 qr. bu.	納付 qr. bu.	売却 qr. bu.	納付 qr. bu.	売却 qr. bu.	納付 qr. bu.
1286	7	3	3	4			61	1		
1287	12	0	18	0			132	3½	15	5
1288	34	6		2			128	4	11	6
1289	23	0	14	3			43	8		
1290			4	1			19	0	6	0
1291	10	5	7	0			41	2	61	8
1292	1	4	5	0			17	12½	95	4
1293	7	0	1	5			5	0	60	0
1294	3	1	4	0			98	1	10	0
1295	14	3	1	4		51 5	87	11		
1296							99	5	10	0
1297	9	0	32	5			186	5		2 0
1298	3	4	5	4			55	12	40	0
1299	8	4	10	0			95	10		
1300	8	4					141	0		
1301	7	5	18	3½			88	7½		
1302	5	2	8	7			127	2		
1303	16	3½	5	3			55	4½		
1304	7	0	2	5			100	6	3	5
1305	18	5			2	2	56	1		7
1306	26	6½	7	4		2½	56	8	1	1½
1307	53	4¾	13	7			31	15½	4	1½
1308	66	5½	11	5	10	6	?		8	1
1309	53	6½					109	3	9	1½
1310	45	6½			1	0	80	0	115	7½
1311	53	3½	9	6			22	4	87	15
1314	45	4½	5	7½			23	1	44	0
1316	38	5	2	0			74	13	8	2½
1317	1	2					23	0	132	0½
1318	37	2½	5	5			60	0	89	7½
1319	62	2½	5	0			60	0	79	6½
1320	61	3¾	8	4			31	4	34	5
1321	20	7	1	4			26	4	95	15½
1324	40	2½					43	4	10	4¾

〔出所〕 *Comptus servientis de Ebbene*

量を確保していた。納付される穀物の種類と量は、マナーごとに異なっていたばかりでなく、同じマナーでも1年ごとに変化していた¹²⁾。このことは、修道院が各マナーの播種や収穫の状況を十分に把握していたことを示すものであるが、すべてのマナーが常に穀物を納付していたわけではなく、納付が例外的にしか行われなかったマナーもある。Ebonyはそうしたマナーの一つであった。このマナーの穀物の納付状況を示したものが表3である。

ライ麦と豆類は一度も納付されたことがなく、すべてマナーで売却された。小麦の納付は生産のピークを過ぎた後の1316、17年のわずか2年しか行われず、しかもその量は売却量の10%にも満たなかった。オート麦は1290~94、96、98、1317年の8年にわたって、したがって、オート麦から小麦への転換が始まる以前に納付が集中して行われた。量的にも、1291~93年には売却を上回る納付が行われており、1290年代にはオート麦の納付を修道院から義務付けられ

ていた感がある。しかし、1279年から1327年にかけてオート麦と小麦を、双方ともにであるか、いずれか一方であるかは別にして、毎年送付していた Great Chart と比べれば¹³⁾、Ebony におけるオート麦の納付回数はいかにも少なく、したがって、1290年代の納付を一時的・例外的な措置とみなすべきであろう。

このように、小麦やオート麦の納付が一時的なものであったから、Ebony における穀物生産の拡大が修道院の穀物需要を反映したものでないことは明らかである。この点、修道院への納付を行うために生産を拡大した Great Chart とは対照的であった。

ところで、大麦であるが、マナーではほとんど栽培されなかったにもかかわらず、1295年の51qr. 5 bu. を皮切りに、1310, 11, 14, 17～21年の9年間に合わせて378 qr. 2bu. が修道院の穀物倉に送られた。これらは小麦やオート麦のように収穫されたものの一部ではなく、すべて Ebony マナーが購入して納付したものであった。金額にして£99. 17s. もの大麦を購入してまで納付したのは、修道院が他のマナーで調達できなかった分の確保を Ebony に命じたからであろう。修道院が Canterbury 周辺で購入することをせず、わざわざ Ebony から調達したことは、修道院が必要とする穀物はマナーが供給するという原則があったことを示すものであろう。いずれにせよ、大麦に対する修道院の需要はこのマナーの穀物生産とは無関係なものであった。

2) 穀物価格

Ebony で売却された作物の平均価格は表4に示したとおりである。この価格は、売却が一度しか行われなかった場合にはそれを1qr. 当りに換算したものであり、取引が複数回行われた場合には取引ごとに得られた1qr. 当りの価格を単純平均したものである。表4を用いて、播種面積の変動が価格とどのよ

うにかかわっていたかを明らかにするが、ここでは、生産に占めるウエイトの小さいライ麦と大麦、地力の維持を目的として小麦に連動して植えられた豆類を除き、小麦とオート麦についてのみ考察する。

表4からは小麦とオート麦に関して次の諸点

表4 穀物の平均売却価格(1クォーター当り)

年度	小麦	ライ麦	大麦	オート麦	豆類
	s. d.	s. d.	s. d.	s. d.	s. d.
1286	6 0	5 0		4 2	
1287	5 0	4 3		3 8	2 6
1288	3 8	3 0		2 9	2 0
1289	3 7	2 6		3 3	
1290		3 9		3 8	2 0
1291	6 7	6 8		4 9	4 0
1292	6 8	6 0		5 0	4 0
1293	6 3	5 0		4 6	4 0
1294	8 4	6 0		5 11	5 0
1295	7 4	6 8		5 4	
1296				5 8	
1297	7 0	5 0		4 3	4 6
1298	9 0	6 0		7 0	
1299	7 0	5 6		5 6	
1300	5 6			3 4	
1301	6 0	5 0		5 0	
1302	6 4	5 0		4 6	
1303	6 0	3 6		4 0	
1304	5 0	4 0		3 9	3 0
1305	6 11	4 6	4 6	5 10	4 3
1306	5 7	4 0	3 6	4 9	2 8
1307	5 9	4 2		5 8	5 4
1308	6 3	4 8	3 7	4 7	3 2
1309	7 9			4 9	4 0
1310	8 0		5 2	5 2	4 7
1311	8 2	4 6		4 4	3 8
1314	6 0	5 0		4 2	2 8
1316	12 8	13 2		10 11	7 8
1317	16 0	20 0		8 2	9 0
1318	9 3	7 6		6 8	5 8
1319	4 5	3 4		3 0	2 8
1320	4 5	2 10		3 3	2 7
1321	5 3	4 0		3 7	3 1
1324	6 3			4 4	4 3

[出所] *Comptus servientis de Ebbene*

を指摘できよう。

①若干の例外を除き、小麦はオート麦よりも1s. 以上高い価格で売却された。

②小麦とオート麦の価格は時代が下るにつれ

て上昇する傾向にあり、しかも両者の動きはほぼ平行であった。

③1316, 17年に異常な高価格がみられる。これは15～17年の長雨, 洪水, 飢饉が影響したもので¹⁴⁾, 18年の高価格はその余波を受けたものである。

②に関して表2-2で設定した期間の平均価格を示せば、小麦は5 s. 9 d. (1286～94年), 6 s. 7 d. (1295～1304年), 6 s. 10d. (1305～14年), 8 s. 4 d. (1316～24年)であり、オート麦は4 s. 2 d. (1286～94年), 4 s. 10d. (1295～1304年), 4 s. 11d. (1305～14年), 5 s. 8 d. (1316

～24年)であった。このように、価格が上昇しつつあり、しかも小麦の価格がオート麦よりかなり高ければ、マナーがオート麦を犠牲にして小麦栽培を拡大することは当然であろう。それゆえ、価格の上昇につれて小麦の生産が常に拡大したのであれば、価格上昇が生産の拡大を促した要因であったと結論づけることも可能であろう。しかし、実際には、1295～1304年と1316～24年に小麦生産は縮小しているのである。それゆえ、価格が生産変動の唯一の要因であったと規定することはできない。これらの時期には価格以外の要因が働いたはずであり、以下にお

表5-1 小麦の生産性
(収量/播種量)

年度	播種量 qr. bu.	収量 qr. bu.	倍率
1286	8 1	19 4	2.40
1287	7 4	41 2	5.50
1288	6 4	27 4	4.23
1289	4 4	4 6	1.06
1290	6 0	16 6	2.79
1291	6 1	6 6	1.10
1292	5 2	11 4	2.19
1293	4 4	8 0	1.78
1294	4 7	15 3	3.15
1295	1 0	0 3	0.38
1296	3 2	10 7	3.35
1297	1 7	5 4	2.93
1298	2 0	12 2	6.13
1299	3 6	11 2	3.00
1300	3 4	11 5	3.32
1301	4 1	10 2	2.48
1302	5 0	19 0	3.80
1303	3 2	15 0 1/2	4.63
1304	8 2 1/2	28 7	3.47
1305	10 4 1/2	38 7	3.68
1306	14 4	58 4	4.03
1307	20 4 1/4	84 3	4.11
1308	16 2	73 7 1/2	4.55
1309	21 3	65 3 1/2	3.06
1310	19 7	78 7	3.97
1316	1 4	3 8	2.67
1317	16 0	58 3	3.65
1318	21 6	87 0	4.00
1319	21 2	74 4	3.51
1320	13 4	40 4	3.00

[出所] *Computus servientis de Ebbene*

表5-2 オート麦の生産性
(収量/播種量)

年度	播種量 qr. bu.	収量 qr. bu.	倍率
1286	52 0	255 12	4.92
1287	60 4	246 2	4.09
1288	57 2	140 10	2.46
1289	56 0	126 9 1/2	2.26
1290	50 2	207 14	4.15
1291	58 8	213 5	3.65
1292	56 0	167 12	3.00
1293	57 8	221 12	3.86
1294	63 11	205 6	3.22
1295	64 14	288 8	3.52
1296	66 1	288 15	4.37
1297	60 8	212 4	3.51
1298	68 8	214 2	3.13
1299	67 2 1/2	261 9	3.89
1300	65 7	205 6	3.14
1301	69 1	238 2	3.45
1302	59 11	170 8	2.86
1303	61 9	223 4	3.63
1304	62 2	166 15	2.69
1305	52 15	121 11 1/2	2.30
1306	53 4	101 3 1/2	1.90
1307	45 0	124 13 1/2	2.77
1308	59 10	179 2 1/2	3.00
1309	55 4	188 14	3.42
1310	62 0	230 6	3.72
1316	73 12	234 0	3.17
1317	65 0	202 2	3.11
1318	57 8	201 4 1/2	3.50
1319	58 0	174 0	3.00
1320	73 4	210 9 1/2	2.88

[出所] *Computus servientis de Ebbene*

いては、これを問題にする。

3) 穀物の生産性

小麦とオート麦の生産性を示したものが表5-1, 表5-2である。本稿では、土地の生産性ではなく、種子の生産性、すなわち収量を播種量で割った収穫倍率 (yield ratio per seed) を用いた。

はじめに、小麦の生産性と播種面積の関係を問題にする。

極端に低い倍率が並ぶ1290年代前半が最も生産性の低かった時期で、その後しだいに数値は高くなり、1300年代後半に最も高い水準に達した。1316年以降には若干の低下がみられ、1295～1304年とほぼ同じ水準になった。これを1286～94年、1295～1304年、1305～14年、1316～24年の平均倍率の形で示すと、それぞれ2.69, 3.35, 3.90, 3.37となる。小麦生産が最も低調であった1295～1304年に生産性が著しく上昇したのは、小麦がおそらくは最も肥沃な耕地に限定して栽培されたためであろう。生産が著しく拡大された1305～14年に生産性が最も高くなったのは、後に述べるように、泥灰土や石灰が散布されたからであり、1316～24年に低下したのは石灰肥料の散布が中止されたからである¹⁹⁾。

1295～1304年の生産性は直前の時期よりかなり高く、一見したところ、この時期に小麦生産が最も低調であったことと矛盾しているかのようである。しかし、平均収穫倍率3.35は、上で述べたように、播種地が限定された結果を示すものであって、これらは決して矛盾するものではない。生産の縮小は、むしろ、直前の時期の生産性と関連づけて論じられるべきである。すなわち、1286～94年に生産性がかなり低かったこと、より具体的に言えば、1289年以降に生産性が極端に低下したことが、95年からの小麦生産の縮小を引き起こしたと考えるべきである。逆に、1295～1304年に生産性が著しく改善されたことが、1305～14年の小麦生産拡大の契機となったのである。

このように、直前の数年間の生産性はその後

であった。しかし、これが小麦生産を規定する唯一の要因であったと考えることはできない。なぜなら、1305～14年に収穫倍率が最も高い水準にあったにもかかわらず、直後の1316～24年に小麦生産が縮小されたからである。したがって、この時期の縮小は生産性以外の要因で説明されるべきである。

つぎにオート麦の生産性と播種面積の関係を考察する。

平均収穫倍率は1286～94年が3.51, 1295～1304年が3.42, 1305～14年が2.85, 1316～24年が3.13であった。平均播種面積はそれぞれ、113.7 a., 131.4 a., 106.8 a., 124.9 a である。したがって、1295～1304年の生産性が高かったにもかかわらず1305～14年に作付面積が縮小したことと、1305～14年の生産性が低かったにもかかわらず1316～24年に作付面積が拡大したことは、生産性と播種面積に関するこれまでの説明と矛盾する。これらをどのように解釈すべきであろうか。

1305～14年の縮小は生産性とは無関係な政策的な縮小であった。つまり、1295～1304年のオート麦の生産性は高い水準にあったものの、小麦の生産性も高く、すでに述べたように、より高い価格で売却できる小麦の播種面積を増やすためにオート麦を犠牲にしたものである。1316～24年の拡大も、小麦の播種面積の縮小と大麦生産の中止による穀物生産の縮小を回避するために行われたもので、生産性とは無関係な政策的な拡大であった。

このように、小麦生産に重点が移ってからは、オート麦は従属的な位置におかれ、その作付けは政策的顧慮をもって拡大され、あるいは縮小されたのである。したがって、オート麦に関するかぎり、生産性は二義的な意味しかもたなかったように思われる。

以上、1295～1304年の小麦生産の縮小を生産性とのかわり方で説明することができた。残された課題は1316～24年の小麦生産の縮小を説明することである。これを農業収益の観点から説明する。

4) 農業収益

農業経営の収益計算には大きな困難がつきまとい、正確な数値を得ることは事実上不可能である。例えば、修道院に納付された穀物は評価額といった近似値を用いざるをえないし、家畜群の一部にしかすぎない農耕用牛馬の飼育費用を牧畜経営費全体から切り離して算出することも困難である。このため、本稿では以下の手続きによって収入、支出、収益を求めた。

「収入」はマナーで売却された穀物の売上高に納付された穀物の評価額を加えたものである。「支出」は、会計報告書のなかの農業関連費目から、上級役職者として複数のマナーの管理を行っていた *custos* (monk warden) と *ballivus* (steward) への支払い、固定資本である穀物倉や納屋などの建築・修繕費、マナーそのものの維持費である堤防や干拓の費用、家畜の購入費などを控除したもので、穀物の購入費、犁と荷車の購入・修繕費、石灰肥料の散布費用、除草などの直接的な農作業費、荘役と下役 (*bedellus*, *beadle*) への支払い、農業・牧畜経営の基幹労働力であるファミルスの給金を合計したものである¹⁶⁾。

マナーの穀物生産はこのような支出をとまなっていて行われたが、本稿で問題とするのはその生産高ではなく、余剰である。したがって、収穫のうち、種粃、現物給、飼料など再生産に必要な部分を費用面に現れない経常支出として処理し、売却されたり、納付された余剰分のみを収入とした。それゆえ、ここでの「収益」は、余剰穀物の評価額とそれを生産するために投入された費用との差額である。厳密さを欠くことは否定できないが、これを用いて1316～24年の小麦生産の縮小を説明する。

Ebony マナーの収入、支出、収益の推移を示したものが表6-1であるが、これには納付を目的として購入された穀物は含まれていない。納付を目的とする購入がマナーの穀物生産とは無関係なものだからである。この表からは以下の諸点を指摘できよう。

①1286～94年：収入は£15を下回る年が多

表6-1 収入・支出・収益

年度	収入	支出	収益
	£ s. d.	£ s. d.	£ s. d.
1286	15 19 0	11 8 4¼	4 10 7¼
1287	34 8 8½	8 10 5¼	25 18 2¼
1288	23 2 8½	9 1 4	14 1 4½
1289	13 1 2	10 18 10½	2 2 3½
1290	5 17 11½	9 6 8¼	▲3 8 9¼
1291	33 5 9	10 10 6½	22 15 2½
1292	30 12 2	10 5 10	20 6 4
1293	19 5 6¼	12 4 4	7 1 2¼
1294	36 17 7¼	10 11 4¼	26 6 2½
1295	30 16 0	8 17 5½	21 18 6½
1296	32 11 2½	12 7 2¼	20 3 11¼
1297	56 10 3¼	10 5 1	46 5 2¼
1298	36 14 9	9 11 7¼	27 3 1¼
1299	32 9 6	9 3 11	23 5 7
1300	25 16 9	9 5 5¼	16 11 3¾
1301	28 19 10¾	8 17 4	20 2 6¾
1302	34 6 4	8 2 10¾	26 3 5¼
1303	16 18 6¼	12 12 7½	4 5 11¼
1304	22 10 3	15 14 11½	6 15 3½
1305	26 17 10½	22 17 9¼	4 0 1¼
1306	22 4 1	27 6 5½	▲5 2 4½
1307 ^(註)	28 5 5½	<26 18 5½>	<1 7 0>
1308	32 3 5¼	14 4 2½	17 19 2¾
1309	46 4 5	21 13 1	24 11 4
1310	48 19 5¼	22 14 11¼	26 4 6½
1311	40 5 8	16 15 10½	23 9 9½
1314	25 15 7	13 9 0½	12 6 6½
1316	73 13 3½	19 13 9	53 19 6½
1317	73 4 4¼	46 9 0½	26 15 4¼
1318	53 11 8¼	11 18 1½	41 12 8¼
1319	32 6 11¼	10 2 11	22 4 0¼
1320	20 13 8½	9 12 9	11 10 11½
1321	24 15 10¼	10 8 2	14 7 8¼
1324	25 14 1	9 8 4	16 5 9

〔出所〕 *Comptus servientis de Ebbene*

〔備考〕 ▲はマイナスを表わす

〔注〕 「荘役・下役への支払い」と「ファミルスの給金」が不明なためそれぞれ1306、08年の金額の平均値をあてた。このため「支出」と「収益」は近似値で示してある。

く、最も低い水準にあった。支出も他の時期より少なかったが、収入の水準を反映して、収益はかなり少なくなっている。

②1295～1304年：収入は£30を超える年度が多くなり、直前の時期に比べてかなり改善されている。支出も決して多くなく、収益は03,

04年を除いてほぼ£20を超えた。

③1305～14年：収入は09～11年が高い水準にあった結果、全体としてはかなり多くなっている。しかし、小麦生産のピーク時であることを考えれば予想外に少ない。支出はかなり増えており、この結果、収益はかなり少なくなっている。

④1316～24年：15～17年の長雨、洪水、飢饉による穀物価格の高騰を反映した16～18年の異常な高収入により、この時期が最も収入が多いが、19年以降にはかなりの減少がみられる。16,17年に支出が多かったものの、高収入が幸いして収益もかなり多い。

表6-2 収入・支出・収益の平均

期間	収入			支出			収益		
	£	s.	d.	£	s.	d.	£	s.	d.
1286～1294	23	12	3	10	6	5	13	5	10
1295～1304	31	15	4	10	9	10	21	5	6
1305～1314	33	17	0	20	15	0	13	2	0
1316～1324	43	8	7	16	16	3	26	12	4

[出所] 表6-1

収入、支出、収益の平均を示した表6-2により、上に述べたことを確認する。

収入はしだいに増加しているが、支出は小麦生産が活発であった1305～14年に突出して多かった。この結果、収益は1316～24年が最も多く、1295～1304年がこれに次いで多い。最も少なかったのは1305～14年で、1286～94年とほぼ同程度であった。したがって、小麦生産が低調であった時期のほうが活発だった時期よりも経営状態が良好だったことになる。Great Chartにおいてもみられる¹⁷⁾、矛盾に満ちたこの結果こそが、1316～24年に小麦生産が縮小されたことを、同じことであるが、1305年に始まった小麦生産の拡大が14年に終了したことを、説明する鍵である。

小麦生産の拡大がなぜ収益の悪化を招いたのか。これを表7を用いて具体的に考察する。表7では小麦生産が低調であった時期を、これまでの1295～1304年ではなく、1297～1304年に限定して示してある。小麦生産がピークにあった

期間とデータの数をそろえたためである。このため、この時期の収入、支出、収益の平均値は表6-2とわずかながら異なっている。

1297～1304年の収入、支出、収益の平均はそれぞれ、£31.15s.9d., £10.9s.3d., £21.6s.6d.で、1305～14年のそれは£33.17s., £20.15s., £13.2s.である。したがって、小麦生産の拡大は£2.1s.3d.の収入の増加、£10.5s.9d.の支出の増加、£8.4s.6d.の収益の減少をもたらしたことになる。収益の悪化は何よりも支出の著しい増大に求められるが、収入の伸び悩みも原因の一端であった。

収入の伸び悩みは、基本的には、小麦生産の拡大がオート麦生産の縮小をともなったことに起因する。例えば、1305～14年の小麦の平均売却量は45qr.4bu.で、1297～1304年(8qr.)より約37qr.増加したのに対し、オート麦の売却・納付量は71qr.9bu.で、1297～1304年(108qr.9bu.)より37qr.減少した。これを金額で示すと、小麦は£2.11s.10d.から£15.3s.7d.に£12.11s.9d.増加したものの、オート麦は£26.9s.5d.から£15.9s.1d.に£11.0s.4d.減少しており、差し引き£1.11s.5d.の増加にしかならなかった。したがって、小麦の増加分のほとんどがオート麦の減少分で相殺されたことになる。それゆえ、オート麦を犠牲にした小麦生産の拡大であったことが収入増のネックになったのである。

支出の内訳について1305～14年と1297～1304年を比較すると、穀物の購入費と泥灰土・石灰の散布費用、農作業費の3費目においてかなりの開きがみられる。これらの平均値を求めると、穀物の購入費は£5.15s.7d.と£1.8s., 泥灰土・石灰の散布費用は£5.14s.4d.と£1.5s., 農作業費は£2.10s.9d.と£1.8s.11d.になり、3費目のみで超過支出分(£10.5s.9d.)の約97%を占めた。

穀物の購入費は、納付を目的とした購入分を除外したものであり、すべて農業経営を続ける上で不可欠な費用である。穀物は、多かれ少なかれ、播種用、支給用などにほぼ毎年購入され

表7 収入と支出の内訳

	1297年		1298年		1299年		1300年		1301年		1302年		1303年		1304年	
	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.
穀物の売却収入	56	10 3/4	22	14 9	32	9 6	25	16 9	28	19 10/4	36	6 4	16	18 6/4	22	10 3
納付穀物の評価額			14	0 0												
収入合計(A)	56	10 3/4	36	14 9	32	9 6	25	16 9	28	19 10/4	36	6 4	16	18 6/4	22	10 3
穀物の購入費	2	8 10	1	15 0/4	1	13 9	1	18 0/4	1	6 3/4	1	1 0/4	15	2 1/4	5	8 1/2
穀・荷車の費用	3	10	8	3	5	10	3	8 1/2	9	0/4	7	2 1/2	0	10/4	9	2
泥灰土・石灰の散布費用															6	13 7/4
農作業費	1	13 5	1	11 3 1/2	1	7 4	1	4 11	1	2 0	14	8	1	11 6 1/2	2	7 4 1/4
荘役・下役への支払い	3	4 7	3	3 6	3	2 10	3	1 10	3	3 8 1/2	3	3 8 1/2	3	1 10	3	2 4
フアムルスの給金	2	14 5	2	13 7	2	15 0	2	16 11	2	16 3	2	16 3	2	16 9	2	16 9
支出合計(B)	10	5 1	9	11 7 1/4	9	3 11	9	5 5 1/4	8	17 4	8	2 10/4	12	12 7 1/2	15	14 11 1/2
収益(A-B)	46	5 2 1/4	27	3 1 1/4	23	5 7	16	11 3/4	20	2 6 3/4	26	3 5/4	4	5 11 1/4	6	15 3 1/2

	1305年		1306年		1307年 ^(注)		1308年		1309年		1310年		1311年		1314年	
	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.	£	s. d.
穀物の売却収入	26	17 10 1/2	22	4 1	28	5 5 1/2	32	3 5 1/4	46	4 5	48	19 5 1/4	40	5 8	25	15 7
納付穀物の評価額																
収入合計(A)	26	17 10 1/2	22	4 1	28	5 5 1/2	32	3 5 1/4	46	4 5	48	19 5 1/4	40	5 8	25	15 7
穀物の購入費	2	7 9 1/2	7	7 4 1/4	12	2 11 1/2	2	12 8	7	10 11 1/4	9	0 7 1/4	2	4 0	2	18 0
穀・荷車の費用	11	13 5 1/2	7	2	10	6 1/2	15	8 1/4	12	0	16	1	1	4 6	19	0 1/2
泥灰土・石灰の散布費用	3	6 9 1/4	11	8 3 1/2	6	7 7	2	8 6 1/4	4	7 8	4	9 4	4	19 7 1/2	3	9 9
農作業費	2	2 4	2	9 7 1/4	2	0 2 1/2	2	6 6	2	17 4 3/4	2	7 1 1/2	2	8 10	3	9 9
荘役・下役への支払い	3	6 9 1/4	3	2 10	3	5 8	3	8 6	3	7 10	3	7 0	3	2 8	3	3 6
フアムルスの給金	2	16 9	2	10 9	2	11 6	2	12 3	2	17 3	2	14 9	2	16 3	2	18 9
支出合計(B)	22	17 9 1/2	27	6 5 1/2	26	18 5 1/2	14	4 2 1/2	21	13 1	22	14 11 1/4	16	15 10 1/2	13	9 0 1/2
収益(A-B)	4	0 1 1/4	▲5	2 4 1/2	1	7 0	17	19 2 1/4	24	11 4	26	4 6 1/2	23	9 9 1/2	12	6 6 1/2

(出所) *Comptois servientis de Ebbene*
 (注) 〈 〉 の数値は近似値である。表6-1の(注)を参照のこと。

ていた。1305～14年には1297～1304年よりも£4以上多く支出されたが、そのほとんどはファミルスに支給された大麦の購入費である¹⁸⁾。それまではオート麦が支給されていたが、播種面積の削減によって収量が減少したため、オート麦に代えて大麦が支給されるようになった。これが1305年に大麦栽培が開始された背景であるが、収穫だけでは支給分を満たせず、年平均£4.1s. 5d.の大麦の購入が行われた。したがって、この支出の増加分もオート麦を犠牲にした小麦生産の拡大によって生じたものである。

泥灰土と石灰の散布は1303年に初めて行われ、以後11年まで続けられた。それゆえ、小麦生産の本格的な拡大に先立って行われ、ピークに達する直前に中止されたことになる。泥灰土や石灰は、言うまでもなく、石灰分が乏しい土壌を改良するために散布されたもので、アップランドのみならずマーシュランドにおいても、また、小麦の播種地のみならずオート麦の播種地においても散布された。作付けの拡大による生産性の低下を恐れて石灰肥料が散布されたことは明らかである。したがって、小麦生産の拡大が散布費用の増加をもたらしたことになる。農作業費の£1以上の増加も播種地の拡大にとまらなうものであり、それゆえ、1305～14年の支出の増加分のほとんどは小麦生産の拡大にとまらなう、止むを得ざる出費であった。

以上から明らかのように、1297～1304年に比べて£10.5s. 9d.も多く支出して小麦生産を拡大したにもかかわらず、収入は£2.1s. 3d.しか増えず、収益は増えるどころか、£8.4s. 6d.も減少したことになる。すなわち、価格と生産性の上昇をきっかけとして小麦生産を拡大したものの、オート麦の収量が減少したために収入はそれほど増えず、逆に、泥灰土や石灰の散布費用、支給用の大麦の購入費などの出費がかさみ、予想に反して収益が悪化してしまった。この結果、小麦生産の拡大政策に修正を加えざるをえなくなった。これが、1305年に始まった積極経営がほぼ10年で断念された最も大きな理由である。この点ではGreat Chartと

ほぼ同じであった¹⁹⁾。

以上、小麦生産の拡大がなぜ短期的な現象に終わったかを収益性の面から説明したことになるが、最後に、1316～24年の穀物生産に簡単に触れておきたい。

商品作物としては小麦のほうがオート麦よりすぐれていた。このため、軌道修正を余儀なくされた16年以降においても、マナーの小麦生産に対する意欲は衰えず、その作付面積はわずしか縮小されなかった。大麦栽培の中止、ライ麦畑の削減によってオート麦の播種面積を回復すると同時に、泥灰土や石灰を散布する代わりに豆類の作付けを増やした。その結果、総播種面積は最高の水準に達した(表2—1, 表2—2参照)。これが1316～24年の軌道修正の内容である。石灰肥料の散布が行われなくなったにもかかわらず小麦の削減が小規模にとどまったのは、散布期間中の生産性が最も高い水準にあったためであろう(表5—1参照)。泥灰土を散布したにもかかわらず生産性が低下し、小麦の生産を大幅に縮小せざるをえなかったGreat Chartと大きく異なる点である。

1316～24年の収入、支出、収益の平均はそれぞれ、£43.8s. 7d., £16.16s. 3d., £26.12s. 4d.で、1305～14年に比べて収入と収益がそれぞれ、£9.11s. 7d., £13.10s. 4d.増え、支出が£3.18s. 9d.減少した(表6—2参照)。それゆえ、収支内容が著しく改善されたことになるが、これはすべて16～18年の異常な高価格による高収入がもたらしたものである(表4, 表6—1参照)。この3年を除いた19～24年のみでみると、収入、支出、収益の平均はそれぞれ、£25.7s. 8d., £9.18s. 1d., £15.9s. 7d.となり、いずれも穀物生産が最も低い水準にあった1286～94年とほぼ同程度の数値になる。収入と収益の低下は穀物価格の低落によってもたらされたものであるが²⁰⁾、穀物生産が最も高い水準にあり、しかも小麦とオート麦の生産性がとくに低かったわけではない1319～24年の収支内容が、生産水準の最も低い1286～94年と同程度であったということは、このマナーの

穀物生産の将来が決して明るくないことを暗示するものである。

Ⅳ 結 語

以上が、1286年から1324年のおよそ40年間にわたって Ebony マナーで展開された穀物生産の分析である。これまでの論点を要約すれば、以下の諸点になる。

①小麦生産の拡大期にはオート麦生産は縮小し、小麦生産が低調な時期にはオート麦生産は活発であった。このことは、Ebony マナーでは小麦とオート麦の同時的な生産の拡大が不可能であったことを示している。

②1305～14年にはオート麦の播種面積を削減して小麦生産が急激に拡大されたが、小麦の播種地はほぼインフィールドに限定されており、アウトフィールドでは例外的にしか栽培されなかった。

③小麦生産の急激な拡大は、1295～1304年の小麦価格の上昇と生産性の向上を背景として行われたものであり、修道院の穀物需要とは無関係であった。

④土壌が劣悪であったため、生産の拡大時には泥灰土と石灰の散布が行われた。小麦がインフィールドに限定して栽培されたこともあり、石灰肥料の散布効果は大きく、播種地の著しい拡大にもかかわらず生産性は上昇した。

⑤小麦生産を大幅に拡大したにもかかわらず、支出の増加に見合う収入の増加を実現できず、収益はかえって悪化し、考察期間を通じて最も低い水準にあった。

⑥収益を悪化させた要因として、収入面では増加した小麦の売却収入のかなりがオート麦の減少分で相殺されたこと、支出面では泥灰土や石灰の散布費用、支給用の大麦の購入費などが大きく増えたことがあげられる。

⑦収益性の悪化こそが1305年に始まる小麦生産の拡大をほぼ10年間で終わらせ、16年以降の小麦生産の縮小を引き起こした原因である。石灰肥料の散布によって生産性が上昇したため、

1316～24年の縮小規模はわずかなものにとどまった。

⑧収益額が最も多かったのは1316～24年であるが、異常な高価格の年度を除いた19～24年のみで見ると、その額は1295～1304年よりかなり少なくなる。それゆえ、小麦生産が最も低調であった時期の収益が実質的には最も多くなる。

以上のように、カンタベリ修道院の1マナーである Ebony では、小麦の価格上昇と生産性の向上を契機として、14世紀初頭に小麦生産を著しく拡大したものの、支出の増加に見合う収入の増加を実現できず、収益の悪化を招いて小麦生産の縮小を余儀なくされた。拡大の動機や小麦の播種状況、生産性など種々の点で異なるものの、Great Chart でも収益の悪化が小麦生産縮小の原因になっていたから、カンタベリ修道院に属する二つのマナーではほぼ同じ時期に同じ理由で小麦生産が縮小したことになる。収益の低下を理由とする穀物生産の縮小がこの修道院の他のマナーにおいてもみられるかどうか、さらには、他の所領についてはどうか、これを検討することが筆者の今後の課題である。また、Ebony においても Great Chart においても、小麦生産あるいは穀物生産が不活発な時期のほうが活発な時期よりも収益内容が良好であった。このような矛盾に満ちた結果が何を意味するのか、これを明らかにすることも筆者の今後の課題である。

注

- 1) 「13・14世紀の Great Chart マナーにおける直営地耕作について」(『阪南論集』社会科学編 第27巻第1号, 1991年)。以下においては、拙稿「Great Chart マナー」と略称する。
- 2) 史料は Canterbury Cathedral Archives and Library が所蔵するもので、筆者が利用したのはそこから入手したマイクロ・フィルムである。
- 3) この修道院の会計年度はミカエルマス(9月29日)から翌年のミカエルマスの前日までの1年であり、暦年では2カ年にまたがる。例えばエドワードI世の治世第14年(1286年)の荘役会計報告書は、1285年の9月29日から1286年の9月28日までの1年間のマナーの経済諸活動を記録したものである。

それゆえ、会計報告書にもとづいて年代を示す場合、正確には1286会計年度として暦年と区別する必要があるが、表記の便宜上、本稿ではこれを単に「1286年」とした。したがって、1286年は、若干の例外を除き、原則として1286会計年度を表わす。

- 4) Ann Smith, 'A geographical study of agriculture on the Kentish manors of Canterbury Cathedral Priory 1272～1379' (unpublished M.A.thesis, Liverpool Univ., 1961) p.48; R.A.L.Smith, *Canterbury Cathedral Priory: A Study in Monastic Administration*, Cambridge Univ. Pr., 1943, p. 173.
- 5) R.A.L.Smith, *op. cit.*, p.166.
- 6) 1286～1324年の34年間の支出総額は£ 212. 10s. 11d. であり、毎年£ 6. 5 s. 支出されたことになる。最も少なかった1296年にはわずか 9 s. 1 d. しか支出されなかったのに対し、最も多かった1288年には£ 24. 4 s. 5 d. もの費用が必要であった。
- 7) Ann Smith, *op. cit.*, p.27.
- 8) E.Miller & J.Hatcher, *Medieval England—Rural Society and Economic Change 1086—1348*, Longman, 1978, pp.93～4; 拙稿「14世紀前半のカンタベリー司教座聖堂付属修道院領マナーにおける穀物輪作」(『星陵台論集』第13巻第2号, 1980年)
- 9) 耕地区分については Ann Smith にしたがった。Ann Smith, *op. cit.*, Figure XI. この他にも固有名詞のついていないものも含めて、いくつかの耕地が存在する。そのほとんどはマーシュランドであると考えられるが、耕地区分が判然としないため、掲載しなかった。
- 10) Ann Smith は、O.Botfelde や P.Donne, Vetus Forstalle などを出フィールドに分類している。
ditto.
- 11) 前掲拙稿「Great Chart マナー」81～82頁。
- 12) 拙稿「13・14世紀におけるカンタベリー修道院とノリッチ修道院の穀物調達について」(『星陵台論集』第17巻第1号, 1984年) 18～21頁。
- 13) 前掲拙稿「Great Chart マナー」86頁。
- 14) R.A.L.Smith, *op. cit.*, pp.125～6; J.Z.Titow, 'Evidence of weather in the account rolls of the Bishopric of Winchester 1209—1350' (Economic History Review, 2nd series, XII, 1959～60)pp. 384～7.
- 15) Great Chart では、泥灰土の散布にもかかわらず、生産性が著しく低下した。小麦がアウトフィールドで盛んに栽培されたためであろう。前掲拙稿「Great Chart マナー」81～3, 90～1頁。
- 16) 地代を納付する農民がこのマナーには居住していなかったようであり、ファムルスが農作業に加えて堤防工事なども行っていたようである。
R.A.L.Smith, *op. cit.*, p.173.
- 17) 前掲拙稿「Great Chart マナー」94頁。
- 18) この間の支給用大麦の購入総額は£ 32. 11s. 5½d. であり、年平均£ 4. 2 s. 5 d. 支出されたことになる。
- 19) 前掲拙稿「Great Chart マナー」92～4頁。
- 20) 19～24年の売却価格の平均は小麦が5 s. 1 d., オート麦が3 s. 7 d. で、価格が最も低い水準にあった1286年～94年をも下回った。

(1994年5月30日受理)